

書評・紹介

横超慧日 編著
村松法文 著

「新羅元暁撰二障義」

吉 津 宜 英

本書は昭和五十四年十一月の出版であるが、翌五十五年七月龍谷大学で開催された第三十一回の日本印度学佛教学会において、結城令聞博士は「大谷大学蔵横超師近刊元暁撰二障義に因み華嚴の智徹・法蔵と元暁との関連について」と題して本書を紹介しつつ、二障義を始めとする元暁（六一七—六八六）の教学がいかに中国の華嚴教学、なかでも法蔵（六四三—七二二）のそれに大きな影響を及ぼしているかについて発表された。残念ながら結城博士は印度学佛教学研究第二九号誌上に寄稿されず、それは口頭発表のみに留まったけれども、公の場で本書の紹介をされたのであるから、その時の発表を拝聴した一人として、このことを先ず始めに明記しておきたい。

さて、本書の「あとがき」によれば横超慧日博士が大谷大学図書館所蔵の二障義を発見されたのは博士が東方文化学院東京研究所に勤務されていた昭和十年代の初期、今から約四十数年前のことであったと言われる。博士は二障義の内容の重要性に

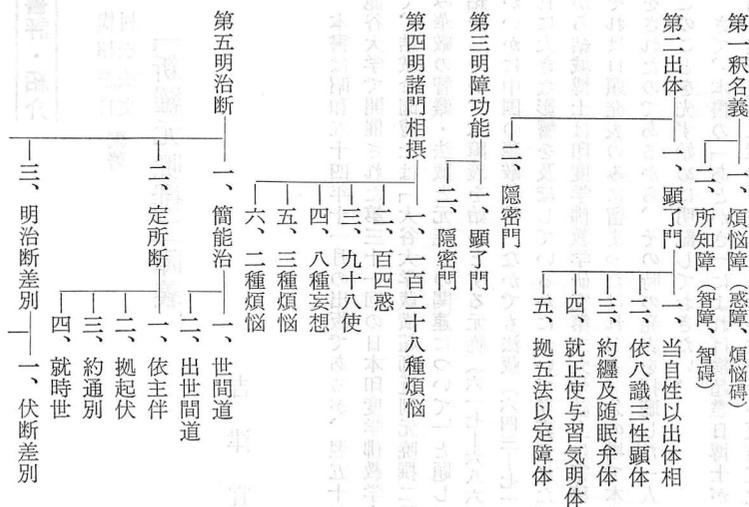
驚かれ、その解説をさっそく東方学報東京第十一冊之一（昭和十五年三月刊）に「元暁の二障義について」と題して発表された。

そして昭和二十四年に大谷大学教授として就任され、多くの著作を世に出され、江湖を裨益されたことは今さら筆者のごときもの喋々すべきことではない。今また博士はよき協力者村松法文氏を得て、本書を出版された。今はその内容及び博士の論文を紹介し、元暁研究の動向についても少しく考えてみたい。

本書は本文篇（六七頁）と研究篇（六九頁）の二篇より成る。本文篇は二障義の原本に句読点を付したものである。研究篇は冒頭に先の横超博士の論文を収め（七頁以下）、二障義の略料を示し（二頁以下）、本文の校注を掲げ（二七頁以下）、本文の引用文の典拠の一覧を挙げる（三七頁以下）。そして最後に既にふれた「あとがき」が付されている。

さて前篇本文篇の凡例によれば、二障義原本は和装本袋綴じで、一丁半面は二三三・一センチ×十六・二センチ、一行十九字詰、八行で一巻八十七丁の筆写本で、奥書には本文と同筆で「慈尊末流応理円実宗英実」と記されていることから、筆者は法相宗の英実であることがわかる。この英実の行迹は不明であるが、表紙に本文とは別筆でもって「応理円実宗沙門実算」と書かれている。その実算という人が建長四年（一二五二）に維摩会の講師を勤め、生駒の良遍あるいは新院良算の弟子と伝えられる実算のことであれば、その実算は鎌倉時代初期の法相宗の学匠であるから、この本の原本は鎌倉時代の法相学者に研究された手沢本であろう、と横超博士は研究篇所収の「元暁の二障

義について」という論文の冒頭で考証しておられる。さて、二障義は次のような大綱より成る。



第六 惣決択——六問答一難通



これらの大綱を一見して、その第二門と第三門とにおいて特に顯了門と隱密門との二門に分けており、また大綱では出ていないが他の諸門でも、この二門の体系に分けて論述が進められていることは明らかである。これも横超博士によって明らかにされているように、顯了門の所で玄奘三蔵所伝の唯識学に含まれている二障説を扱い、隱密門では特に勝鬘経や起信論に出る二障説や五住地説を取り上げている。そして顯了門の二障説については詳細に論述されているが、それは隱密門の煩惱障に収まり、隱密門の所知障、つまり住地煩惱は顯了門では説かれていないとし、一応隱密門を以って顯了門を被い、前者の深奥を示す。しかし、横超博士も言われるように顯了門の教説の次元の低さを主張したと考えるべきではなく、新来の唯識佛教とそれ以前の佛教、ここでは特に起信論の教学との差異を確認しつつ、相互の連関を意図したと言ふべきで、和会という言葉は用いられていなくても、明らかに元暁の和会の姿勢の一つの形態を示している。一つの経論を偏重するよりも、すべての経論を会通和融していこうとする所に元暁の佛教観があるとと思われるのである。

ただ、この文献が正倉院文書の中で「起信論二障章」とも呼ばれているように、起信論の教理によって立てられた章門であり、起信論の教理が会通和融において重要な役割を担っていることも忘れてはならない。この点は元暁の多くの著作の中で特に起信論疏および同別記をどのように扱うべきかという問題とも結びつくが、今は問題提起だけに止めよう。

さて、この二障義の第五明治断の四門分別のうちの第四「明治断階位」の項を法蔵が参照し、その二乗と菩薩の断道のあり方を華嚴五教章の所詮差別の断惑分齊第六（大正蔵四五、四九二頁中）では大乘始教と終教との区別に転用しているとの横超博士の御指摘は重要である。古来、元暁の起信論疏と同別記とを法蔵の起信論義記が大いに参酌していることは有名であったが、今や五教章と二障義との関連が指摘され、更に近時鎌田茂雄博士『十門和讃論』の思想的意義（『佛教学』第十一号、昭和五六年四月）において十門和讃論の内容が五教章所詮差別の種性差別第二に転用されているとの論証がなされると元暁と法蔵との思想的関連は質量ともに予想以上のものがあることがわかるのである。冒頭にふれた結城博士の印佛学会での御発表も智儼法蔵師資による華嚴教学の形成に対して、特に法蔵の思想に与えた元暁の教学の影響の大きさの指摘に中心があったように思う。私自身も最近元暁の起信論疏および同別記と法蔵の義記とを対照研究し、さらに宗密の起信論疏を読んでみて、元暁疏がそれら華嚴宗の人々の注釈に与えた影響の大きさに驚き、かつ元暁研究の必要性を痛感したところである。

さらに横超博士は元暁の思想研究のためには慈恩基（六三二—六八二）の教学との対照を力説されている。前の論文では二障義の研究のためには特に大乘法苑義林章の中に収められている断惑章を視野に入れるべきことを述べられ、また本書の「あとがき」では「元暁の二障義と、窺基の唯識述記及び唯識概要を比べる時、元暁の歴史的位置づけがはっきりしてくるように思う」と言われ、より一層法相唯識学との対置の必要性を前面におし出されたのである。このことは二障義の本文を読み、特に玄奘所伝の教学による顯了門の部分に縦横に引用された唯識関係の経論に接する時に肯首されるのであるが、本書では詳細な「二障義引用文典拠」が添えられ、我々は元暁所引の原典にまで容易にさかのぼって考えることができるように工夫配慮されている。そこには瑜伽論を始めとする多くの唯識典籍の引用が示されていて、元暁の博引旁証には驚嘆のほかはない。この元暁の思想研究のための玄奘所伝の唯識の重要性は元暁自身が玄奘所伝の経論の多くのものに注釈を施していることによっても立証されよう。元暁には多くの著作があったことが知られているが、それらの中に解深密経疏三卷・瑜伽抄五卷・雜集論疏五卷・中辺分別論疏四卷（第三卷のみ存）撰大乘論抄四卷・広百論宗要一卷・判比量論一卷（断簡存）・因明論疏一卷など主要な唯識経論への注釈が存在したことは元暁にとって玄奘唯識は単に批判の対象ではなく、彼の教学の中で重要な支柱の一つであったことを示している。

以上、横超博士の高論の指摘によって元暁における玄奘所伝

の法相唯識学の比重の大きさと元暁教学の法蔵への影響との二点を取り上げたのであるが、一番の問題点は元暁の著作を総合的に検討し、彼の思想を立体的に明確にし、そこに二障義を位置づけることであろう。元暁の著作は現存のもの、目録などに名前の出るものを加えると六十部以上、百三十巻にも達する膨大な量になる。そのうち現存のものは東国大学出版の『韓国佛教全書第一冊』（一九七九年一月）にすべて収められており、二十三部二十六巻にすぎない。目録上の数字から比べると部数で半分以下、巻数では六分の一以下のものしか現存していないことになる。ともかく現存の著作について、著作相互の引用関係を調べてみると二障義は涅槃宗要に一回、金剛三昧経論に五回、起信論疏に二回、それぞれ引用されている。この二障義と並んで多く閑説されるのが一道章であり、本業経疏に一回、起信論疏に二回、二障義に一回、そして中辺分別論疏に一回引用されている。この一道義あるいは一道章は現存しないので内容はわからないが、正倉院文書では二障義と同様に「起信論一道章」とも呼ばれていることから、起信論の分別発趣道相に拠って立てられた章門で、五十二位や唯識の五位の修行体系などを詳論したものであろう。二障義が煩惱の側面から断道に展開する文献であるのと対比して、一道義は正面から修道論を扱ったものであるように推察され、両者は元暁教学の断惑証理の体系を表わす重要な二つの文献であったと考えてよいのではないか。そして、その両者がいずれも起信論を基盤として立てられた章門と思われ、元暁の佛教思想における起信論の重要性が改めて浮

び上がってくるように思う。

以上のことから本書の発刊は元暁の教学の形成とその展開を研究してゆこうとする我々にとって大きな資料と刺激を与えられたといえることができよう。これまでの元暁研究を概観する時、もっとも広く研究されているのは両卷無量寿経宗要、阿弥陀経疏、さらには遊心安楽道などの文献に拠る元暁の浄土思想の領域であろう。しかも恵谷隆戒博士によって遊心安楽道偽作説が提起され、その問題はいまだ解決していないように見受けられる。その浄土教の分野に比べれば細々ながら法華宗要・涅槃宗要・金剛三昧経論・起信論疏などの研究も遂行されている。しかしながら、個々の著作の教理を分析する段階に留まり、著作相互を縦断して、総合的に研究してゆく方向には至っていない。本書は先にも少しくみてきたように一経一論の注釈ではないが故に、その研究は元暁の思想を総合的に把握してゆく視点を与えてくれるであろうし、従来の個々の著作の研究成果はこの二障義の体系の中で再検討されることも必要であろう。

そして元暁の総合的研究を推進してゆくためには横超博士の御指摘のように法相基の教学の研究の必要性はもちろんのこと、それに加えて地論慧遠（五二一—五九二）、三論吉蔵（五四九—六一二）、華嚴智儼（六〇二—六六八）などの研究の進展とそれらを元暁の教学と対比することが必須の課題となるだろう。特に基の膨大な著作に向っての真摯な研究が行なわれていないことは中国佛教思想史研究の遂行にとっても大きな障害であり、我々華厳学研究者の視野に入れて研究すべきものかとも思うが、中国

法相宗の専門の研究者の輩出を願うのみである。

さて、以上は元暁の思想形成の面での研究課題であるが、何といつても元暁は新羅の人であり、彼の思想を明らかにしてゆくことは新羅高麗の佛教史にとって最大の課題であることは言うまでもない。入唐して智儼に就学した義湘(六二五—七〇二)は一乗法界図だけを著わし、入唐しようとしながらも断念した元暁は膨大な書物を残した。これら対蹠的な両者の教学を明らかにしてゆくことが大切であるが、義湘のそれが智儼の延長として把握できるのに対して、元暁には無師独悟の独自性が感取されるのである。我々はこの二年間鎌田茂雄博士の御指導の下に高麗朝初期の華嚴学者であった均如(九二二—九七三)の積華嚴教分記円通鈔の輪読会を続けている。その第一回目の成果が「積華嚴教分記円通鈔の注釈的研究」(『東洋文化研究所紀要』第八十四冊、昭和五十六年三月)であるが、この均如はもちろん義湘の華嚴の法統を継承しているけれども、元暁の教学を多く引用している。著作名で言えば十門和諍論・普法記・涅槃宗要・華嚴宗要・金光明經疏・起信論疏・中辺分別論疏・一道章、そして二障章などの引用が見られ、また典拠の知られない元暁の言葉も

多く引かれている。この均如の文献にも義湘とともに元暁を重視してゆく新羅高麗佛教の一つのあり方が表われているように思う。

このような義湘・元暁から均如や義天の活躍、そして知訥(一一五八—一二二〇)の出現に至るまでの新羅高麗の佛教史は深く日本の鎌倉時代の佛教に反映しており、特に華嚴の二大巨匠である高弁(一一七三—一二三三)と凝然(一二四〇—一三三二)の著作には新羅や高麗の佛教文献が多く引かれ、大きな影響を受けていることが知られる。このように元暁の研究を始めとする新羅高麗佛教史の闡明は日本佛教史研究をも裨益するのである。

この点からも本書出版の意義を高く評価することができる。同時に、このような貴重な文献がこのような形で多く世の中に出てきてほしいと思うのである。横超懸日博士の長年の念願の成就を寿ぐとともに村松法文氏の労苦に思いを馳せ、本書の紹介のしめくりとしたい。

(昭和五四年一月 平楽寺書店 B5版 本文篇六七頁 研究篇六九頁 六、五〇〇円)